大学図書館に期待するもの

寺門 臨太郎

筑波大学　芸術系

大学図書館に期待するもの

◉講義の構成

1．美術史(学) Art History と美術の歴史 History of Art の方法

2．美術史研究者がつくられる環境

3．大学図書館に期待するもの
　　⇒「もの」としての資料の蓄積と発信

◉キーワード

・「もの」material and/or tangible object(s)

・至高性／主体性 sovereignty

（1）「美術」という制度と「作品」

美術館という場で（制度／枠組みのなかで）目にする展示物

→ わたしたちの文化が恣意的に「美術(作品)／アート」と呼び，価値づけたもの

→ 元来「美術(作品)」は美的な愉しみのために つくられたとはかぎらない

→後世の価値観で「美的」な機能をあとづけし 文化や素材のちがいを超えた あらたな文脈が あたえられたもの が「美術(作品)」（？）

（1）「美術」という制度と「作品」

美術史 art history というディシプリン

絵画, 彫刻 (＋建築, 工芸) ＝「美術 art」
「造形芸術 die bildende Kunst」

→ 個々の「美術(作品)」を「歴史」という
時間軸にのせて体系化する研究

→「美術」をめぐる物語の批判と再構築
ストーリー化

→　美術の歴史 History of Art として記述

（２）「傑作」への投資

美術館という場で目にする「傑作」

「傑作」というイメージ≠美術作品

→「傑作」と呼ばれるようになるよりも前の
「美術(作品)」は見ていない（？）

→『「傑作」というイメージ』を批判的に見る
B・クルーガー
《あなたは傑作の神威に投資している》(1982)

→「傑作たるもの」をめぐる
あらたなストーリーの再構成

（3）「もの」としての美術作品の至高性，あるいは「もの」が主張する主体性

「もの」の至高性ないし主体性 sovereignty への意識

→「もの」そのものの豊かさへの気づき

→「もの」そのものの持続可能なちからへの共感／批判

◉美術作品は
「常に歴史家がそれについて問うているところのものにしたがって，それ独自の特殊な真理やメッセージを明らかにする」。

（ハンス・ベルティング，元木幸一訳『美術史の終焉？』勁草書房　1991年［原著: 1983; 1995[2]］）

（4）米国ウィリアムズ･カレッジの教育研究組織

1793年創設
マサチューセッツ州ウィリアムズタウン
全米リベラル･アーツ･カレッジでトップ･ランキング

→「ウィリアムズ･マフィア」
・輩出した美術史研究者は米国屈指

→　豊かなコレクションをもつ大学附属美術館
・Williams College Museum of Art

徒歩圏に Clark Art Institute

（４）米国ウィリアムズ･カレッジの教育研究組織

Williams College Museum of Art

・美術史専攻の教員，院生，学部生のほか
隣接諸領域の教員や学生が研究･教育に利用

・「もの」に即した研究方法の習得

・「もの」としての美術作品の熟覧方法の獲得

・所蔵作品･資料を活用した展示実習
→「もの」を使った美術史 Art History の実践
→「もの」を使った美術の歴史 History of Artの
ストーリー化

（４）米国ウィリアムズ･カレッジの教育研究組織

Sterling and Francine Clark Art Institute

・中世末期から近代のヨーロッパおよびアメリカ美術
・年間入館者およそ20万人

・蔵書数豊かな図書室（1962年創設）＝275,000冊以上
・閲覧室にはウィリアムズ･カレッジの院生専用机

・国内外からのvisiting scholar のための助成金制度

（１）ふたつの美術史

美術史 vs 美術史 ＝ 大学 vs 美術館
（組織［職場］環境のちがいによる対立）

Charles W. Haxthasen (ed.), *The Two Art Histories: The Museum and the University*, Williamstown (Mass.): Sterling and Francine Clark Art Institute, 2002.

＠大学・・・・専らブッキッシュな美術史研究

＠美術館・・・常に「もの」に寄りそう美術史の実践

（１）ふたつの美術史

美術史 vs 美術史 ＝ 大学 vs 美術館
（組織［職場］環境のちがいによる対立）

寺門臨太郎･赤間和美（編）
『シンポジウム「ミュージアムとしての大学キャンパス」』
筑波大学芸術系・五十殿利治［科研報告書］，2013年.

@大学･････専らブッキッシュな美術史研究

@美術館･･･常に「もの」に寄りそう美術史の実践

（2）愛知芸術文化センター

1992年開館の複合施設＝美術館＋劇場＋図書館

◉愛知県美術館
- 1955年開館の前身館による玉石混淆の収集を継承
- 1990年代の日本で他に類をみない予算規模

◉愛知県文化情報センター・アートライブラリー
- 美術，音楽，演劇の専門図書館
- パリの美術商旧蔵の図書資料
  「タリカ・コレクション」22,000余冊
  → 質量ともに国内最高水準のリソース

（１）知のショールームとしての大学ミュージアム

mouseion・・・・・・ムーサイ mousai の神殿

・ギリシア各地に建設
・最も有名であったのは在アレクサンドリア

◉プトレマイオス父子による学芸の振興
→ 王宮内にムーセイオン mouseion を設置

→ 80万冊超の蔵書を誇る図書館
天文台, 解剖室,動物園, 植物園,宿泊施設

⇒ 展示機能なし

（１）知のショールームとしての大学ミュージアム

galleria

・ルネサンス期の西ヨーロッパ

古代遺物発掘ブーム
→ 美的鑑賞という行為／制度の確立

新興都市商人による陳列回廊 galleria の開設
［フィレンツェのメディチ家など］

（１）知のショールームとしての大学ミュージアム

cabinet, wunderkamer, kunstkamer

・大航海時代から植民地時代

非西洋世界へのまなざし
→ 情報と「もの（珍品 curiosity）」への熱狂
→「世界の縮図」としてのコレクション
→ power の誇示

・動植物や鉱物の収集，分類，体系化
→ 博物学 nautralis historia の本格的成立と発展
→ 近代的 museum の制度基盤へ

（２）オーソライズされたミュージアム組織をもたない大学の知

・国立の総合大学で唯一，大学ミュージアムなし

・国立の総合大学で唯一，芸術（art & design）に特化した研究教育組織と専門図書館あり

→独自の知のありよう
本来的な「自由学芸 liberal arts」のありよう
いわゆる「論文」とは異なる仕方での研究成果発信

→「美術(作品)」の至高性ないし主体性を活かした知のショールーム化

（３）（机上の）ＭＬＡ連携議論

・学外の学術情報の収集から
学内の学術情報の蓄積と発信へ

・法による規定の脆弱さ？
→ 日本の大学図書館は
設置主体としての大学の一個の傘下組織か

・「デジタル」アーカイブの非アーカイブ性

・「もの」（図書, 古書籍, 手稿本, 写本等）としての資料の必要性
→ デジタル資料 過信への警鐘
（あるいはデジタル化された資料）

（３）（机上の）ＭＬＡ連携議論

植村八潮
『電子出版の構図：実体のない書物の行方』
2010年　印刷学会出版部

フェルナンド・バエス
八重樫克彦、八重樫由貴子訳
『書物の破壊の世界史：シュメールの粘土板からデジタル時代まで』
2019年　紀伊國屋書店

（４）筑波大学体芸図書館で「もの」と図書館の至高性あるいは主体性を問う

◉専門図書館の強みを活かした情報の蓄積と発信

にもかかわらず
雑誌購入費（各研究組織への運営費等交付金で定期購読）の削減につぐ削減

→ 作品購入費や展覧会開催経費等のない地方美術館の実績を下回る購読タイトル数

→ 学術資源／資料の枯渇

→研究力／教育力の低下に直結

（４）筑波大学体芸図書館で「もの」と図書館の至高性あるいは主体性を問う

◉専門図書館の強みを活かした情報の蓄積と発信

・ラーニングコモンズの環境整備
「ユーリカ」
芸術専門学群（学士課程）や大学院博士前・後期課程の学生によるインスタレーション

・知がうまれる環境を象徴する「もの」の展示
「もの」の至高性や主体性に期待する学術資料としての美術作品の公開

（４）筑波大学体芸図書館で「もの」と図書館の至高性あるいは主体性を問う

◉専門図書館の強みを活かした情報の蓄積と発信

・ラーニングコモンズの環境整備
「ユーリカ」
芸術専門学群（学士課程）や大学院博士前・後期課程の学生によるインスタレーション

・知がうまれる環境を象徴する「もの」の展示
「もの」の至高性や主体性に期待する学術資料としての美術作品の公開

・ポスター・コレクション（データベース2014年で停止中？）と蔵書(図録)をリンクさせたテーマ展示